

新訂 ロバート・オウエン著作史
豫備的考察

——ロバート・オウエン文献学的研究論考(II・完)——

五 島 茂

[目 次]

Part III	3
Ch. III. Vision 第三	5
New Harmony の時期 (1825-1828)	
Ch. IV. Vision 第四	13
無産階級 Owenism (1828-Sept. 1834)	
The Crisis.	
補説	
東京大学経済学部図書館新購入の Owen Collection (1995)	45

Part II

Ch. III. Vision 第三

New Harmony の時期 (1825-1828)

ロバート・オウエン (Robert Owen, 1771-1858) の思想の中核を協同 (Co-operation) ととらえ、Vision 第一、第二としてその掌握を進めて来た。ここに Vision 第三以下を論究しようとおもう。

Vision 第三はいわゆるオウエンの 'American or Communitarian phase' である。わずか4年しかつづかなかつたが、この段階のオウエンは強弱いずれの位相も露呈した。Vision 第一の優秀な企業経営的資質は、目をあざむくほど欠落し、単なる utopian におちいってしまい、しかもそれを強行しつづけた。彼としていろいろなことを考えてのことであろうが、事態はきびしかった。オウエンの巨万の富はむなしく費消されつくした。彼は実験に失敗したのだ。しかし彼の信念も情念もそれによって失われはしなかったこと、その後のオウエンの行動そのものがものごたる。帰英の途 Mexico にも vision をかけようとしたのがその一証左である。[(65) Memorial to Mexican Republic. 五島茂『ロバート・オウエン著作史』第1巻, 補遺 p. 31; 第2巻, p. 47 参照。]

[所在]

[i] B.L. P.P. 6392 n.

[ii] G.S.L. A. 828 (2) 上左寄りに To the Emperor of the Brazils Respectfully presented by the Memorialist という autograph がある。

[本邦における所在]

[石版] 名古屋大学附属図書館

Indiana University 教授 William E. Wilson の 'The Story of New Harmony' の副題のある *The Angel and the Serpent*, Indiana University Press, Bloomington & London, 1964. は史料と臨場感のあふれたのびのびした筆致でひとをひきつける。そこにこういう一節がある。

「オウエンの New Harmony は、かつてドイツの敬虔派の指導者ラップ (George Rapp) の建設した宗教協同体の故地を購入した上に建設したものだ。ラップはキリスト再臨の至福一千年期 (millennium) を待つ意図で Harmonie を建設した。オウエンは彼が彼と一緒にミレニアムをもたらすと信じて町に来た。こん日 New Harmony を訪れる者が見るものはすべてこの世の終末を予期したラップの造ったものであり、新世界を創ろうとしたオウエンは眼に見えるもの、形のあるものは何も残していないのは paradox のようにもおもえる。しかし訪れたひとがもし歩きまわっていけば自然にわかってくるように New Harmony のスピリットはオウエンの遺産なのだ」と。

かくして 1825 年 1 月 3 日、ラップとオウエンは売買契約書類に署名して譲渡は成立した。買収条件も広告をもちこんだフラワーの話とはちがい、ポウジー州の公簿にのこるのは、20,000 エーカーに対して 125,000 ドル。一年後オウエンが支拂ったという記載である。オウエンは売買当日午後三時にあわただしく現地を離れて東部へ赴いた。折よく大統領選が終わったばかりでまだアメリカ政界の指導的人物が首都に多数残っていた。オウエンに開放された国会議事堂でオウエンは 1825 年 2 月 25 日と 3 月 7 日講演をゆるされた。当選新大統領 J.Q. アダムズ、前任のモンローはじめ内閣の各長官、最高裁判事、国会議員らが列席した。有名なこの二回の演説は (46) American Discourses といわれる。

[所在]

1] 第 1 部のみのもので：—

a) The Library of Congress, HX 696. 0. 9.

(五島『著作史』第 1 巻, p. 144 を見よ) on the Feb 25, 1825.

b) G.S.L. A. 825. (4)

(大きさ) 15.4 cm×10 cm.

bA) Another copy.

五島『著作史』第 2 巻, p. 41 の Prof. Foxwell への批判 (誤りの指摘) を見よ。

c) L.S.E. (Pam Collection 83.072 又は HX 71 (大きさ) 16.6 cm×10.1 cm. 表紙あり.)

d) G.D.H. Cole Collection.

Nuffield College, Oxford B.B. 48 (4)

2] *Mr Owen's second discourse on a new system of society: as delivered in the Hall of Representatives of the United States, In the presence of the President.... on the 7th of March, 1825...* Washington, 1825. 20 p. 22½cm. Printed by Galese & Seaton, 1825. 26p. 18½cm.

3] 完本.; —

a) B.L. 8276. de. 13 (7).

(大きさ) 20.2 cm×11.8 cm.

b) G.S.L. A. 825. (3)

(大きさ) 20.7 cm×13.2 cm.

(注意) 見返しに Prof. Foxwell の書込みあり。すなわち extremely rare./It contains rules for New Harmony &c. とある。

c) London, Printed by Whiting & Branston. Sold at the office of the London Co-operative Society, 1825. 36 p. 20 cm.

d) Printed by Whiting & Branston. のみ 1825, 36 p. 20 cm.

e) N. L. W. HX. 640-29.

f) G. U. Ea4-f. 1. (5)

(大きさ) 20.5 cm×12.5 cm.

4] [異本] (1) : — Pittsburgh, 1825, 36 p.

[典拠] Williams, J.B.: *A Guide to the Printed Materials for English Social and Economic History, 1750-1850*, Vol. II, p. 548.

▲5] [異本] (2) : — (『著作史』第1巻, p. 145. 補. p. 21)

a) B. L. 8276. bb. 15

(大きさ) 18.6 cm×11.7 cm.

6] (追加) 合本 3 巻. B.L. 6392 n.

[覆刻] (『著作史』第1巻, p. 145; 補 p. 21.)

a) *The New Harmony Gazette*, Vol. II, Nos. 29-31, April 18-May 23, 1827.

b) *New Moral World*, Vol. II, No. 11. Jan. 9, 1836, pp. 81-4. (但し第一部のみ)

c) *New Moral World*, Vol. II, Nos. 40-41. July 30-Aug. 6, 1836. (但し第二部のみ)

d) Gregory Claeys (ed.), *Works of Robert Owen*. (Pickering and Chatto edition, Vol. 2, *Development of Socialism*, 1993, pp. 38-47.)

[本邦における所在]

1] 第一部のみのもの

(i) 法政大学大原社会問題研究所

- (ii) 星島茂氏（24 ページの星島茂教授旧蔵本の説明を参照）
 - (iii) 関西学院大学柴田文庫
 - (iv) 早稲田大学附属図書館
 - (v) 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵
 - a) 貴 J 560 は Washington 版。 *A discourse* …とあって、*first* がない。上記のものになかった珍しい本。
 - b) 貴 A 271 は Manchester 版で、 *The first discourse* …となっている。Hoshijima Collection の印がある。一橋大学で押したものか。
 - (vi) 神戸大学附属図書館
- 2] 完本
- (i) 堀文庫（大阪商業大学図書館）
 - (ii) 慶應大学図書館

3

「私は、完全に新しい社会状態を導入するため、この国へやって来た。無知で利己的な制度から、啓發された社会的制度へと社会を変えるためであり、この社会的制度は、徐々にすべての利害を一つに統一して、個人相互のあいだのいっさいの争いの原因を取り除くだろう。」

(47) *Address delivered by Robert Owen, of New Lanark on the 27th of April.*

こういう自信にあふれたあかるい表現でオウエンは、1825年4月27日 Indiana 州 New Harmony の会館で「ニュー・ハアモニ準備社会の開設にあたって」の演説を行い憲法を公表した。その演説全文と5月1日創立された「ニュー・ハアモニ準備社会規約」なる憲法とは発表された。さいわい全文の邦訳がある。

The Constitution of the Preliminary Society, founded 1st May, 1825, *New-Harmony Gazette*, Vol.1, no.1, 1 October 1825. (都築忠七訳)

(都築忠七編『資料イギリス初期社会主義：オーエンとチャーティズム』平凡社、1975、pp. 100-109.)

意気軒昂としてオウエンは新しい New Harmony の大仕事に没入していったのだ。

(五島『著作史』第1巻、pp. 141-147. 補. p. 22; 第2巻、pp. 42-43)

なお注意すべきはオウエンは New Harmony の実験を 'half-way house' とした点である。これによって彼の幻想のいだき方が幻想に没し切っていない点だ。ところが外見の状況に目がくらんだのか、オウエンは先に予言していた2年ないし3年という時期の跳躍を一挙にとびこえて、翌

1826年2月5日に財産共有の完全協同体を実施したのだ。(The New-Harmony Community of Equality—permanent society).

これが一突角であった。そして分村しきり。

村人の要請でオウエンの一時独裁制もあった。8月オウエンは共同社会のための教育が土地を含む共産制の実施に先行すべきだと宣言した。

オウエンは錯覚の中に生きているようなありさまであった。

4

オウエンの appeal が大きく波うって反応していた。まず新大陸アメリカに住む「エンゼルと蛇」が。やがて、少し時日をおいて、ヨーロッパからもその appeal をききつたえてエリートたちとならずものが、幾重もの洪水となってニュー・ハアモニイを打浸したのだ。そこには重大な選択の原理を忘れた一個のドリーマーのよろこびとかなしみを見る。海綿のようにオウエンの資産を吸いとる天使と蛇は「森の中の天使」オウエンをとりまく。オウエンが居ればいい。その中心の彼が大抵不在なのだ。William Owen は旅に出た父に手紙のたびにそれを書き、悲痛な訴えをしつづけていた。必要なのは熟練労働者だ。ラパイトの経済的成功の裏づけの大きなプラスの教訓は、ここでは一つも生かされていない。ラパイトの施設は作動しうる労働力がないのである。マックも、やがておかれて来た Robert Dale Owen も、それに気づいていたにちがいないが、オウエンのあまりの愚かさに見張るのみであった。そして既倒をくつがえすにはあまりに非生産的な群集が村に充満し、討論し、不平をいい、分裂する。邪悪が、非人間が無欲と見える大オウエンから最後の最後まで財産を剥ぎとろうとした。Robert Dale Owen は後年彼の自伝 *Threading My Way* で「ロバート・オウエンは principle ははっきりのべる。しかし具現するディテールが無かった」と New Harmony の父を顧みて書いている。

1827年4月30日オウエンと William Maclure は金銭上の紛争。1828年4月13日オウエン演説—痛烈な村批判。「個人制度の習慣がきわめて強力で」、いくつかの小規模 community のためにオウエンが貸与した土地も、「少数の例外を除き、個人的目的、個人的利益のために用いられている」ことを発見した。6月失敗、離村したオウエン。

こうして嵐のような年代記を辿った New Harmony は全くむなしく潰えたのか。アメリカに何をのこしたか。冷静に客観的事実は語る。最初の幼稚園、最初の幼児学校 (infant school)、職業学校 (trade school)、無料公立学校制度、婦人クラブ、自由ライブラリー、民間劇団、最初の地質学会本部のセンター、いずれも米国史に不滅の栄光を残した。そしてオウエン一家はみな米国に住居を移し、いずれかの分野に関係活動し名をあげたのである。

New Harmony はすがやかな、しずかな、清潔な、上品な町。私は幸いに 1969 年 1 月末、ハワイ大学大学院一学期出講の終わった帰途訪れ、オウエンの曾孫ケネス・デイル・オウエンの夫人でテクサス州ヒューストンの石油財閥ジェイン・ブラッファ・ケネス・オウエン夫人 (New Harmony の重要な全部を買収・所有し・改修し・管理するブラッファ財団の持ち主) が 1959 年再構築したという No. 404, The Poets' House を特に配慮提供厚遇され 4 日間宿泊し行動した。

その New Harmony の労働者研究所図書館でも見たし、その前日 Indiana 大学 Lily Library でも見たが、何とんでも現物のなかった日本から来て 1931 年 6 月最初に現物を発見・興奮しすぐ検索に没入した大英博物館の *New Harmony Gazette* のおかげが現在でも切ないばかりだ。拙著『オウエン著作史』第 1 巻、「補遺」(British Museum 所蔵の Robert Owen 著作に就ての▲追加) *The New Harmony Gazette*, Vol. I, pp. 22-23; Vol. II, pp. 26-27, Vol. III, pp. 29-30. に書誌的記述はゆずる。参照されたい (▲ (追加) *The New Harmony Gazette*. 合本三巻. [B. L.] P.P. 6392 n. 合本 (大きさ) 22.4 cm×27.9 cm. 頁数 iv+416 p.)。

次に John F. C. Harrison, *Quest for the New Moral World. Robert Owen & the Owenites in Britain and America*, December, 1969 巻末の bibliography (p. 350) の本誌記載は次の通りである。

The New Harmony Gazette, New Harmony, Ind., Vol. 1-III, October 1825-October 1828.

[Ed. succ. by William Owen, Francis Wright, R. D. Owen and R. L. Jennings.]

[continued as *The New Harmony and Nashoba Gazette or The Free Enquirer*. [new series], Vol. 1, October 1828-February 1829 [Ed., Francis Wright and R. D. Owen.]

[continued as] *The Free Enquirer*, New York [new series], Vols. I-IV, October 1828-June 1835.

本誌はいわば *The New Harmony* の文献資料篇である。本誌をめぐるオウエンおよび彼らのこの時代の動きのとじめとしよう。

Ch. IV. Vision 第四

無產階級 Owenism (1828– September 1834)

1. 協同組合の父オウエン

Robert Owen はしばしば「協同組合運動の父」(Robert Owen, Father of Co-operation) といわれている。しかし、これはオウエン在世中のことばではない。生誕 100 年祝祭もすぎた 1875 年の「協同組合会議」(Co-operative Congress —但し 1831 年-1835 年の Co-operative Congress ではなく、それが一旦断絶したのち 1869 年その new series がはじまった。この後者の会議である) ではじめて一代議員が “Owen, Father of Co-operative principles” と命名して発言したのが最初という。⁽¹⁾ また同じ年に初版を出した有名な *The History of Co-operation in England. Its Literature and its Advocates*, Vol. I の著者 G. J. Holyoake が「オウエン = 協同組合運動の父または建設者」のよび名の張本人だったという。ホリヨークの声望と閱歴を思うとき、彼の言葉に力のあったことは怪しむに足りない。事実その後これが常識的合言葉となった。社会思想史・社会史など十中九までこの言葉を使っており、やや専門的なコオペレイターの諸著でもそうで、いわば一種の社会通念化しているオウエン解釈の一つといえよう。

この合言葉の流布がかく広く久しきに及んで、それに対する痛烈な破壊批判がおもわぬ海外から現われた。その筆頭はスエーデンの協同組合中央会の指導者アクセル・ヨーレス (Axel Gjöres) の主著『ロバート・オウエンと協同組合運動の発生』(*Robert Owen och Kooperationen Uppkomst*, Stockholm: Kooperativa bokförlag 1932)。⁽²⁾ 彼は父の意味・含蓄の不明瞭さ、その内包する概念がオウエンに関する場合各主張者によってまちまちだという点に注目して『「オウエン = 協同組合運動の父」伝説』(Legenden upon Owen who «Kooperationens fader») と規定して、その批判を行なったのだ。⁽³⁾

また、例えば近年の著作の一つ R. G. Garnett, *Co-operation and the Owenite socialist communities in Britain, 1825-45*, Manchester University Press, 1972. はこう言う。「彼 (Owen) は組織することは出来た、しかし実際心からの Co-operator では決してなかった。これは Owenites (オウエン主義者たち) の役目であった。協同組合運動はオウエナイトの創始したもの (creation) であってオウエンの創始したものではなかった」と。⁽⁴⁾

しかしこの宣言も、オウエンではなく、オウエナイツとすると、その複数のうちの一体誰が創始

(1) B. J. Rose, Owen as Co-operator, in *Robert Owen and his Relevance to Our Times*, Addresses contributed during the Robert Owen Bi-centenary Summer School, July 17th to 23rd, 1971. Co-operative College Papers Number Fourteen, 1971. Loughborough, p. 45.

(2) ただしこの書の表紙は ROBERT OWEN と大きい活字で書き、その下にやや小さい活字で och Kooperationen Uppkomst とする。オウエン伝が中心で、終り二章を本問題にあてているのだ。

(3) この書の詳しい紹介と私のそれへの反批判は五島「協同組合発生史に関する一論—オウエンは協同組合の父か—」(五島茂『ロバート・オウエン研究』ミネルヴァ書房、近刊第二章所収) を見られたい。またこの小論に対するその後の研究をふまえた論考は都築忠七「オウエン研究と協同組合」『生活協同組合研究』特集ロッチデール 150 周年「協同組合と教育」1994 年 6 月号、pp. 18-25. を見られたい。

(4) R. G. Garnett, p. 41.

者だったといおうとしたのか？ きめ手はない。むしろオウエンのヴィジョンが、そもそも彼らをつき動かし、彼らに滲透し、彼らを Owenized (フランシス・プレイスの言葉) して、彼らをグルーピングに駆り、労働者大衆(職人層・熟練職人層を中心に、しだいに工場労働者群をまきこんで)が行動の目的とインスピレーションと主体性(identity)をオウエンから学びとって、Co-operators になり、運動を引起した。直接運動を引起したのはオウエンではなかったとしても、彼から放射する基軸体を与えられたのである。幾多の否定的批判の存在にかかわらず、今日も依然として「協同組合の父オウエン」の常識は力づく生き、協同組合運動者のひたいに「父」オウエンの刻印は消しがたく押されているのだ。

けれども、オウエンと協同組合の関係は、実は「父」かどうかというよりはるかに複雑な難問を形成している。今でも両者の関係は時々認められているよりおそらくもっと薄い。Co-operative folklore などとして扱われたりするのである。

2. 協同組合の原基形態

七年戦争(1756-1763)と産業革命本格化過程突入がからみあつて進行し、悪徳な製パン業者の横行がロンドンを衝撃していたとき、戦争事態を最も敏感に反映していた首都周辺の Woolwich や Chatham の海軍工廠で Co-operative corn mills が自生した史実に出発し、それ以後 1812 年までだけに発生した生活協同組合(友愛組合を含む)は、私の調査では 36 事例ある。⁽¹⁾ 構造変動期に対応した素朴な毎日毎食の日常的な要求につらぬかれて自然発生的に組織化された協同形態で、多く短命におわたった。むしろ協同組合の原基形態、いわば協同組合の幼虫としてみるべきであるが、形態は前史的であっても、かすかな主体性を見出すものもある。近代協同組合の系譜はかかる自然発生的原基形態から流れ出る発展流と十七世紀のブロックホイを先駆とする協同体類型の交錯するところ、⁽²⁾ その総合によってはじめて真の協同組合の発生を刻銘する。幼虫がはじめて成虫になるのであり、同時に協同組合の体系化の成熟、組合の軀幹形成を意味し、そこにオウエンの協同組合発生史への真の寄与がある。すべてをロッチデール前史と見る従来の見解への新しい反省がある。

(1) 五島茂「協同組合の原基形態」『経済学雑誌』12の3(五島茂『ロバート・オウエン研究』ミネルヴァ書房、第三章所収、近刊)参照。

(2) 五島茂「協同組合源流考—ビイター・ブロックホイについて」(大阪商科大学『経済学雑誌』1941年8月号)参照。

3. 『真実の鏡』

A New View of Society (1813-1814) を出版、大反響をひきおこしたオウエンは New Lanark から頻繁にロンドンに出て、工場立法委員会、救貧法委員会の各委員に選任され、それぞれに報告書を提出した。がそのいずれも社会改造を主張し、平行四辺形を提示するものであったためとりあげられなかった。例えば—

Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor. ... laid before the Committee of the House of Commons on the Poor Laws.
[n. p., 1817]

これらをめぐって公開集会を開催。その折のオウエンの演説の掲載された新聞数種を5万部も買上げて無料配布した。時にはその新聞を積むために郵便馬車のロンドン出発が20分おくれたというエピソードもある。パンフレットも出した。1817年オウエンが「自分の生涯の中で永遠に記憶されるべき事件」と『自叙伝』にしるした第二回講演、1817年8月21日の有名な既成宗教否定の演説は衝撃的であった。オウエンの考え方が顕著になり反対派の抑圧を生み、有力新聞への発表が阻まれる事態になった。

そこでオウエンは自身編集する最初の journal の『真実の鏡』(MIRROR OF TRUTH) を創刊した。1817年10月10日と11月7日にである。MIRROR OF TRUTH の「発刊趣意書」(Prospectus) の邦訳(佐藤共子訳)は都築忠七編『資料イギリス初期社会主義: オウエンとチャーティズム』平凡社、1975年刊、pp. 86-89 に所収。

『真実の鏡』は短命に終わった月刊誌であったが、その tone も language ももはや単なる Communitarianism であるにとどまらず完全に millennialism であることを示し、商業文明の差迫った崩壊を anticipated したものと評された。この時からオウエンの writings もまたその追隨者の writings の大部分にも millennialism の開始を注意していいといわれる。⁽¹⁾

その五年後、*The Economist* が刊行されたのである。*Report to the County of Lanark* (1820-21) の報告形態での印刷過程において、それを実際に印刷したとおぼしい印刷職人たちの間に、はじめはやや星雲状況をまつわらしつつ、報告書の主張態の協同原理を展開し、公刊に至って、ついに *The Economist*, Vol. I, No. 9, March 24, 1821, p. 142 に「最新刊」と発表、至重な *Report to the County of Lanark* の一般への出版年月を確定しえたことは既述した通りである [本論考 (1) p. 48]。

イギリス産業革命進行裡、オウエンは vision 第二で説いた如く、Plan-Community-*The Report to the County of Lanark* を基軸として、その思考の熟成を遂げ、局面をひろげて、幾多の発展肢をたくすすめた。その場合 *The Economist* が Community→Co-operation の重大な移行過程を果たしたと私は久しく説いて来た。オウエンがその後40年にわたり運動機関の週刊誌形態でその主張

⁽¹⁾ J.F.C. Harrison, *ibid.*, p. 92.

を推進・啓蒙・教育を行って来たその最初が *The Economist* なのである。

The Economist については、五島茂『オウエン著作史』第1巻(1932) pp. 110-114, 「補遺」 pp. 18-19, 第2巻(同統篇、英国における著作の所在を中心として。1934) p. 34 で詳細に扱っているので参照されたい。なおその後の私の論究には次の二論文があり、参考になるとおもう。

- 1) 「産業革命とロバート・オウエン. *THE ECONOMIST*, 1821-22 序説」(『東京外国語大学六十年周年記念論文集』[1957] 1958年10月刊。近刊の五島『ロバート・オウエン研究』第四章に所収)
- 2) 「近代協同組合の出発。—The Co-operative and Economical Society, 1821-22 にかんする若干の穿鑿—」(本位田祥男博士古稀記念論文集『西洋経済史・思想史研究』1962年5月、創文社刊。近刊の五島、前掲書、第五章に所収)

4. *The Economist* 書誌と分析

本論考(1)の最終部分でオウエンの思考能力ないし運動実践の展開局面という時期の三部作中、*An Explanation* のみが直接労働階級に appeal するオウエン自身執筆の一編で、それが *The Economist* に載ったと述べた。ここではそれらをはなれて *The Economist* そのものの解明をまとめておこう。

私の使用した *The Economist* は大英博物館(現英国図書館)本である。すなわち B.L. P.P. 1037. (ただし、Vol. II, No. 27 を欠く)であるが、英国留学時代(1931-34)使用したもの、帰朝後大英博物館のご好意によってマイクロフィルムに撮影し送られた。それによって書誌的記述を試みておく。後に本邦にも現物が入荷している。「本邦における所在」の項を見よ。

[Bibliographical Description]

The Economist.

A). Title: —

1) 各号: 一例に第1号を掲げよう。THE ECONOMIST./[片子持野]/No. 1.] *Saturday, January 27, 1821.* [3d./[双柱野]/Homo sum—nihil Humanum a me alienum puto./[片子持野]/I HAVE undertaken a very difficult and arduous/task. にはじまる本文。

2) 合本: —

THE ECONOMIST:/A PERIODICAL PAPER,/EXPLANATORY OF/THE NEW SYSTEM OF SOCIETY/ PROJECTED BY/ROBERT OWEN, ESQ;/AND OF A/PLAN OF ASSOCIA-

TION/FOR IMPROVING THE CONDITION OF THE/WORKING CLASSES/DURING THEIR CONTINUANCE AT THEIR EMPLOYMENTS/[表罫]/HOMO sum — Humani nihil a me alienum puto./TER./[表罫]/VOL. I./[双柱罫]/PUBLISHED EVERY SATURDAY MORNING. IN NUMBERS, PRICE 3d./EACH, BY MR. WRIGHT, BOOKSELLER, No. 46, FLEET STREET,/LONDON; WHERE THE TRADE, NEWSMEN, &c. MAY BE SUPPLIED,/AND WHERE ORDERS, COMMUNICATIONS TO THE EDITOR, &c./POST PAID, ARE RESPECTFULLY TO BE ADDRESSED,/Price 7s. boards/[短表罫] 1821.

B) Collation

1) 各号:—大きさ 18.6 cm×12.5 cm: 頁数毎号 16 ps. ただし Vol. I の最後の号たる No.26 (July 21, 1821) のみは 4 ps. それに続く Vol. II の第 1 号にあたる No. 27 (July 28, 1821) は大英博物館本では欠けている。

Imprint は変化があった。No. 1, 最後、p. 16 最下の片子持罫の下に次の句あり。

Published every Saturday Morning, at the Office for THE/ ECONOMIST, the Medallic Cabinet, 158, Strand, London: where/Orders, Communications, &c. are respectfully requested to be/addressed, post-paid. All booksellers and Newsmen are also/requested to receive orders for this work./[短かい片子持罫]/G. Auld, Printer, Greville Street, London. これは No. 21 (June 16, 1821) までで、No. 22 (June 23) からは最後を除きイタリックとなり、最後は J. and C. Adlard, Printers, 23, Bartholomew Close となる。No. 32 (Sept. 1.) の最後の頁 (p. 104) は *Published every Saturday Morning, by MR. WRIGHT,/Bookseller,/No. 46, Fleet Street, London; where The Trade,/Newsmen, &c. may be supplied, and where Orders, Communications to the Editor, &c. post paid, are respectfully/requested to be addressed./* [飾罫] G. MUDIE, Printer./ となる。No. 51 (March 2, 1822) に至ってまた変更。(後述。p. 23 参照) No. 52 (March 9, 1822) には London:—*Printed by W. RAWLINS, and published at the Central House of the CO-OPERATIVE and ECONOMICAL/SOCIETY, No. 1 Guilford Street East, Spa-fields: and by /W. WRIGHT, No. 46, Fleet-Street.* とある。

2) 合本:

大きさ. 12.7 cm×18.7 cm: 頁数. Vol. I, XII+404 ps.; [p. i] title page; [p. ii] 中央に全文イタリックで書かれた但書あり。

Many of the Readers of The Economist having expressed a desire/that the PROSPECTUS should be so printed as to bind up with the/work, it now accompanies the title page of the first volume; and/may be considered as an Introduction or Preface. The Publisher/presents his respectful acknowledgments for the patronage with/which the Economist has been honoured. 以下空白、下欄外に J. and C. Adland, Printers, 23, Bartholomew Close とある; [p. iii] dedicated page. To/John Maxwell, Esq./Lord Archibald Hamilton,/Sir William de

Crespigny, Bart./—Dawson, Esq./ Henry Brougham, Esq./H. Gurney, Esq./and/William Smith, Esq./The Philanthropic Members of House of Commons/Who,/on the motion of Mr. Maxwell, on the/26th of June, 1821,/For an Address to the Throne, Praying that a Commission/Might be Appointed to Investigate/Mr. Owen's System,/had/The Courage and Consistency,/Under the Sole Influence of/Benevolent Principles/To/Advocate a system/so generally derided by Ignorance and Prejudice;/This Volume/A Humble but sincere endeavour to serve the same Great and Good Cause,/Is Inscribed,/In Testimony of Heartfelt Respect and Gratitude,/for their/Enlightened and Human Conduct,/By/THE ECONOMIST./46, Fleet Street, London; July 19, 1821: pp [iv]-vi, Contents, pp. [vii]-xii, Prospectus, pp. [1]-404. 本文; 頁数 Vol. II. 420 ps.

[分析]

The Economist は1821年1月27日土曜日創刊号を出した。前節書誌に叙述したごとく、誌名のもとにラテン語で「私は人間だ。人類にかかわる何事も冷淡にはおもえない。」というモットウを掲げた。のちに合本版を出したとき、総扉に書かれた full title にはこう書いてある。「Robert Owen, Esq. によって project された新社会制度 (The New System of Society) を解明し、労働者階級 (Working Classes) の状態を、彼らの現在の雇用を継続しながら、改善 (improving) する集団 (ASSOCIATION) の PLAN を解明する定期刊行物 (A PERIODICAL PAPER)」と表示してある。けだしその公然たる目的の端的な宣明である。

The Economist の内容は大きく二つに分かれる。第一群は *Report to the County of Lanark* の一般刊行直前の考え方の敷衍と *Report* 刊行直後からの分載。Malthus 主義経済学者への攻撃。オウエンの重要論文 *An Explanation of the Causes of the Distress* の発表。すなわち Co-operation の発見とその展開を中心におく。

第二群は、初号から最終号までをつらぬいて「協同経済組合」(The Co-operative and Economical Society) のきわめて詳細なクロニクル風の諸報告(創立委員会報告を含む)。これは組合機関誌の任務上当然であろう。なおそれと共に全国各地における類縁的な協同組合ないし協同体の紹介あるいは通信を掲げた。

毎号本文の最初に *The Economist* なる署名の社説風論説を一篇づつ掲げた。その論説の執筆者が誰かが問題。オウエンか George Mudie かとよく言われる。結局は不明としても、この執筆者が本誌の主筆ないし指導者と目されるからだ。

いろいろの史料があるが、ここでは特に注目に値する Holyoake の記述をあげておこう。主題は Francis Place の目を通しての『エコノミスト』とオウエンの関係である。プレイスは、周知のごと

く、ロンドンの洋服職人出身の労働運動者。19世紀半ばからチャーティズムあたりまでのあらゆる労働運動を実際にあやつっていた影の実力者で、端げいすべからざる辣腕家であるのみならず、記録者としても卓抜で関係文献資料の無比の蒐集家で、後に大英博物館に収められた手稿・切抜、一枚もの他の資料は英国近代 labour history の大宝庫である。私自身この Francis Place Collection を在英中随分使用したので、つぶさにそのすばらしさを熟知している。私自身の英文の論文——‘Some Broad-sides on the Reform Movement’ 1831-1832. From Francis Place Collection, British Museum’, *Journal of Osaka University of Commerce*. No. V, December 1937. もこれに拠った。この英文の抜刷は、幸いにも British Museum に所蔵され、後年私が渡英した時、その事実を大英博物館のカードで見出し確認して感銘した。なおこのコレクションについては、五島茂『イギリス産業革命社会史研究—“Dorchester Labourers, — 1834-1840” 事件の研究—』(昭和24年、日本評論社)巻末のビブリオグラフィーに若干詳細に記述しておいた。このプレイス自身所蔵の *The Economist* の合本の紙幅には“Robert Owen”と明らかに書いてあったというのである。重要なのでやや長いがホリヨークから引用しておこう。「プレイスはその本を彼自身の手で白い羊皮紙の背をつけて製本してあった。そしてその上に彼はその著者名とその巻の主要内容を書いたのだ。そこには Robert Owen とはっきり書いてあったという。彼のその *The Economist* はプレイスの書庫の棚に30年以上も列べてあり、明らかに全訪問者の目に触れていた。そしてオウエンもたびたびその本を其処で見たに相違ない。もしそれが間違っていたのだったら、オウエンのあけすけな習慣から察すれば、プレイスにその誤りを卒直に言ったであろう。12年後 *Gazette of the Exchange Bazaars* が発刊されたとき、ピラが発行された。それもプレイスは保存していた。そこには社会の分けられている諸階級—特権階級や王位をめぐって集まる小部分など—の a rude diagram を書いてある。それはオウエンのお気に入りの方式であり、後年オウエンが多くの彫琢を加えて復刻したあれだ。さてこのピラにはこうある。『この書を conduct するであろう人は、1820年ロンドンの協同組合の最初のを設立した人であり、1821-1822年に *The Economist* を、1823年に *The Political Economist and Universal Philanthropist* を、1826-1827年に *The Advocate of the Working Classes* を編集した人だ。そして彼は来るべき刊行物 (*The Exchange Bazaars Gazette*) で論じられるべき諸原理について全国各地で講義して来た人である。それ故彼は、それ以前の極めて長く続けた調査研究によって彼の任務の準備を充分した後に、彼の仕事に入るのである』と。」これに続くホリヨークの記述はあいまいだが興味がある。すなわち「この文、講演、旅行は Mr. Owen について書かれたものと等しい。そしてもしその著者が彼でなかったなら、それは彼の仰々しい文体をキャッチしている人物であった。オウエンは協同組合の主義に興を起しては来たけれども、それらを決して大きいものとは考えていなかった。日用品店舗を世界改造の恥づべき代替物と考えた。この筆者其人の名は直接には漏らされてはいない。しかし教育のあるひとといわれる。このひとがおそらく (possibly) *The Economist* の編集者であったろう。しかし Mr. Owen はその内容の統轄者 (the controlling mind) で、主要執筆者 (chief writer) で、奨励者 (inspirer) であった。すなわち

Mr. Place が製本の上に Owen の名を付したのは正当であったのである。*The Economist* の献本辞（合本版にある一五島）を見ると、それは Mr. Owen が協働してきた正にその人に対して捧げられている。ホリヨークの判定の根拠は何であるかは判らない。しかしおそらくその判断は正しいし想像しうることである。編集者は Mudie であったとしても、オウエンが編集を control し、ある場合には干渉したと見ていい。Mudie はオウエンに軽視されていたし、Mudie とオウエンではけたちがいだったからである。しかも Mudie が「協同経済組合」の事業として実現しようとしていた「集合家族居住協同体」(Congregated Families) は、オウエンの一致と協同の村でもなく、鋤耕パラダイス (spade paradise) でもなく、ロンドン旧市内につくられたものだったからである。

5. 協同経済組合

「協同経済組合」—『ロッチデール開拓者組合創立 100 年記念史』で G. D. H. Cole 教授は、この組合はロンドン地域における最初の著名な協同組合運動で、明確な社会的使命を体現した全国最初のもの、また組合広報誌をもった点で協同組合運動史上第一のケースだと特筆された—この組合の正式の創立は 1821 年 1 月 23 日。しかし事実上の設立はその前日のロンドン印刷職人の総会の決議による。そこには「印刷職人以外の人々も招いて」とある。席上すでに前年 8 月執筆、年末刊行ずみの「委員会報告」を採択。それには「労働者階級の中に協同経済組合と称する一集団 (Association) の結成を勧告していた。これは印刷職人たちを指導していた George Mudie というスコットランド人の新聞記者 (*The Sun* 紙主筆) が作ったもの。彼はオウエンの情報宣伝班の一人であった。当然オウエンの指令と回状を触れて歩く役だが、この組合の設立もオウエンの命令だったかどうかは不明である。さて組合の規則は三度改正を見ている。規則のなかに現われた変化は実践の変化を物語る。最初の規則そのものも設立後 10 ヶ月を経て発表されている。その最初の規則は Constitution として前文と Regulation 21 ヶ條と後記とから成る。前文は言う。

「本組合の終局目的は New Lanark の Mr. Owen によって計画された The Plan にもとづき、農業・工業・交易を結合したひとつの「一致と相互協同の村 (A VILLAGE OF UNITY and MUTUAL CO-OPERATION)」を建設するにある。

その当面の目的は適当な建物を (いくつか) 入手することだ。その中で Mr. Owen の Plan から引出しうる諸利益のできるだけ多くが enjoy されよう。首都における彼らの従前からの職業に現にたずさわりつつある人々によって。

本組合の最初の—それは最も達成しやすいからだ—目的は、食物・衣料品・その他の日常必需品を卸値で購入するための一つの基金 (Fund) を作るにある。そして (組合員が互いに隣りに住んでいる所では)、彼らの住居の、また彼らの子供たちの監督・トレーニング・教育の配慮のため

の協同化の施設を作るにある。

本組合はまた、できるだけ早く、失職しそうな組合員にむかって生産的な雇用を与え、病気や老齢の組合員達やその家族に生活物資を給与するをはかる」。

また組合員に政治的中立、宗教的中立を保証し、「もし友愛 (brotherly love) が満ち充ちていれば組合内部で一つの恒久的悪も成長しがたい。愛は彼の隣人に悪事をしない。それゆえ愛は法を達成させる。」堂々たる宣言といわざるをえない把握である。規則本文は示す。加入金 (5 シル)。基金。非組合員からの貸付金。組合員死亡の際は遺族が組合員になれること。組合ストア管理者の義務。執行委員会 (8 人) の組織と業務内容。「ここからの協同の原理の多くを実行し得る。」集合家族形式の勸奨。組合集会 (すくなくとも週一回)。団体としての政治的中立性。四半年次の報告等を規定している。

第二の組合規則改正は、創立後 1 年 2 ヶ月の 1822 年 3 月 2 日、第三の改正は 1822 年 3 月 9 日。最後のは「協同経済組合回章」(The Society's Circuler) の形式をとる。これらを通じて組合は次第に第一規則のオウエンの影がうすくなり Mudie の掌握力の方が強化されていった。彼のはじめから主張していた「集合家族居住協同体 (The Congregated Families) 設立に向ってすすみ、ついにその実現を見た。一種の団地であり、他のオウエンの協同体が田園に在るのとちがい、ロンドンに建設された。本来の計画は 250 家族 (夫婦子供 2 人を基準) であったが、Mudie 一家も入れてわずか 22 家族を集めえたにすぎなかった。

1822 年 1 月 19 日、*The Economist* 第 50 号に発表された前年 12 月の “Minutes of the Congregated Families” はすでにこの型態の協同体の実在と活動を報道している。11 月 17 日までに組合は Bagnigge Wells Road の Guilford Street East の角にいくつもの家屋を、Spa-fields には 100 人を容れ得る大きい室を一つ入手した。最も注目すべきは「モニター制」(Monitor) の実施で、「集合家族全般の調和と善意」のもとにメンバーの相互規制という組織者の英知を示した。また「医局」(dispensary) も開いた。

また Mudie 自身も 9 月 1 日以後は印刷工の仕事に就き、*The Economist* のインプリントに G. MUDIE, Printer と書いた。が、遂に組合の内部に印刷工場を開設した。*The Economist*, No. 51, March 2, 1822 のインプリントは London:— *Printed and Published at the Central House of the Co-operative and Economical Society, No. 1, Guilford Street East, Spa-fields: and by W. WRIGHT, No. 46, Fleet Street.* と公表した。しかし *The Economist* No. 52, March 9 では、前述 (p.19) のように W. ローリンズの印刷責任の下で同じ工場印刷された。まさに運動史上劃期的事実であったが、これが終刊号になってしまった。Mudie はなお 2 ヶ年この集合家族居住協同体に生活したが、エコノミスト編集者の間もずっと主筆として兼務していた『サン新聞』の経営者側から、協同体を放棄するか、『サン新聞』を辞職するか選べと強制され、前者を選び、協同体を解散した。しかしまもなく新聞からも去り、オウエンの力をつくした Orbiston の協同体実験に向ったといわれる。

Rochdale 公正開拓者組合 1844 年組合規則の 'plans and arrangements' の第 2 項には「彼らの家事の、また社会的の状態改善に相互の助けあいを望む組合員達が居住すべきいくつかの家屋の建設・購入・建築」という明文がある。

ここに公然たる「協同経済組合」の生きた系譜を見出す。それはまさにオウエンの遺産ではなく Mudie の遺産を見る思いだといっていいであろう。

[関係資料の所在]

- 1) B.L. P.P. 1097 (ただし Vol II. No. 27 を欠く)
- 2) R.O.M. (No. 29 Ang 11, 1821 only)
- 3) Prospectus のみは B. L. K. T. C. 1 B. 5 (58)

GSL. *Report to the County of Lanark* 初版本 (4. 20. 2) の終りに合綴。

[本邦における所在]

- 1] 日本大学経済学部、「完全本をもつ」という。
Vol. I. Nos. 1-26, Jan. 27, 1821-July 21, 1821.
Vol. II. No. 27,-No. 52, July 28, 1821-March 7, 1822 (404 pp.) [9]-420 ps. London
Published Every Saturday Morning ... by Mr. Wright [etc. etc.] 1821-1822 2 vols. 21
cm. Weekly/in Portfolio.
- 2] 星島茂教授旧蔵本（貴重なものであったが永眠後の分散により所在不明のまま、惜しむべき限りである。一橋大学社会科学古典資料センターにも移らず、星島氏の五島『著作史』編集時の談では、自分は相当蒐めたが、他の脱けている分は一旦ロンドンにあつめられたが、Rjazanov によって Moscow の Marx-Engels Institute に購入されてしまったとのことであった。）
- 3] 大阪大学特別図書 Robert Owen Collection. CLP. 8503083274. ただし本文 Nos. 1-26 ま
で所蔵。別に Prospectus も一つに綴じてある。
- 4] 松山大学附属図書館
- 5] 明治学院大学附属図書館
- 6] 慶応義塾大学三田メディアセンター
- 7] 神戸大学附属図書館

6. Co-operative Congresses 経過史

John F. C. Harrison はいう。⁽¹⁾ 「労働者階級オウエニズム (Working class Owenism) の三つの制度 (institutions) — 協同組合ストア (Co-operative store)、労働交換所 (the labour exchange)、労働組合 (the trade union) — は、それぞれきりはなして扱われてきたが (treated separately)、事實は、その三つは overlapped, お互いに補完しあった (supplemented each other)。それら三つのものの相互作用 (interaction) の the focus が Co-operative congresses であった」と。

しかし、私はおもう。 kongress の推移を見ると、はじめからこれら三つが一緒になって動いていたのではない。三つの制度というが、store は既に盛んであったが、労働交換所は、原型的には早くからあったけれども、大半はその store の隆盛の上に上乗りのもの。(有名なオウエンの全国衡平労働交換所 (National Equitable Labour Exchange) は 1832 年 9 月はじめて開設された。) 労働組合 (trade union) はもちろん前々からあったが、ここに言う連合体の Trades' Union 運動は Doherty らがリードし、1833 年 '34 年が出だ。Congresses は、したがって、当初はストア業務の必要からおこり、オウエン全運動の「神経中枢」(the nerve centre) となったと見た方がいい。

Co-operative Congresses は 1831 年から 1835 年にわたり、イギリス工業都市に逐次開催された一連の会議であり、協同組合運動史の重要局面である。1820 年代末葉以来とみに活発になった協同組合運動を基底とし、規模は大であるとはいえない。参加ないし関係した協同組合も全部ではなく、その代議員数もその代議員の代表する組合員の総数も多寡不定、組合運動としてはほぼ上向過程にあるものの、それ自体として、未発達の混沌たる様相をあらわにしていたというべきであろう。しかし、それと同時に、「そこでの諸決議は将来の政策にむかっただのガイドラインを提示し」⁽²⁾、そこでの諸問題をめぐる徹底的な論議とそれに立向う諸論者の態度、論構の立て方など、kongress の回を重ねるにつれて、それぞれに運動の発展段階を示すのみならず、kongress は原則として半年ごとに開かれたが、この時期の半年半年は異常、複雑な世相を映してきわめて流動的、というより変転きわまりないという時代であった。事實逐次開催の kongress は、寄せてはかえず大波の間に半年毎に至重な蒼潮を流し込んで大きく動いたのだ。

それ故に各 kongress の経過史が重要である。それに各回の本質的個性が強く打出されるからである。私の丹念な究明の結果の発見ともいえる成果をここに記しておきたい。

Congresses 経過史に関する従来の通説は 1831 年から 35 年までの 5 年間に 7 回とされていた。それは、Holyoake の権威書 *The History of Co-operation in England*, (Vol. 1, 1875 ed., pp. 182-191) 以来の定説で、Hall and Watkins, *Co-operation*, Manchester. 1934, p. 71 も、Mercer も Cole のオウエン伝も何ら疑問なく、それを祖述していた。私はこれに対し次の疑問をもった。「第一

(1) John F. C. Harrison, *op. cit.*, p. 214.

(2) Harrison, *op. cit.*, p. 214.

回」 kongress 以来年二回の方針を堅持しつつ進めて来た kongress が、なぜ「第五回」（1833 年 4 月）まで、突然その方針を放棄し、「第六回」（1834 年 3 月）とのあいだに約 1 年の間隔をおいたのか？ また「第五回」まで向上増大を続けて来た勢いがなぜそこで断ち切れ、以後急に収縮したのか？ —これらの疑問は些細な外貌をもち、今まで全く提起されずに来た問題であった。しかし、このなかに私にとって Congresses の全問題の秘密をひらく鍵があった。如上の疑問をもって Congresses 自体の記録を当時の Owen 派の運動機関誌の *The Crisis* などを巨細に調べていた私は、「第三回」ロンドン・kongress、「第四回」リヴァプール・kongress と辿り、1833 年 4 月「第五回」ハダスフィールド・kongress の報道に至って、そこに明瞭に次の kongress を同じ 1833 年 10 月にロンドンで開催する旨の決議を見出した。そしてそれは実際に開かれた。すなわち従来の通説の「第五回」kongress と「第六回」kongress の間に正しく半々年の間隔で今一回の—すなわち『(第二次) ロンドン・kongress』ともいうべき集会在厳に存在したのである。しかも私のいわゆる『第二次ロンドン・kongress』こそ、それまでの協同組合運動の性格変化を来す転回点として特別に重大視すべき大集会であったのだ。それは単なる Co-operative Congress ではなく、“London General Congress of Delegates of Co-operative and Trades’ Union” として、会期も 6 日間の長期にわたった。ちなみに、この場合重要なのは、会議構成の代議員の所属をあらゆる Delegates of Co-operative and Trades’ Unions そのものであって、“General Congress という表示語ではないことだ。この General Congress という表示は、それ以前の Co-operative Unions のみの kongress の場合にも使用されていたからである。たとえば「第二回」Co-operative Congress 正式議事録 (Proceedings) [第一回は費用不足で正式の議事録は印刷公表されなかった] にも出ている事実を注意しておきたい。

さてこの『第二次ロンドン・kongress』によって、それまで高まってきた協同組合運動の波は、明白に、当時の全運動機構にその一翼として組み込まれるに至り、やがて、これが「労働組合大同団結」(Grand National Consolidated Trades’ Union) 結成の契機となり、この第二次ロンドン・kongress のメンバーがグランド・ナショナルの一要素となったのだ。これで今迄の協同組合の kongress の別個開催の意義は消滅することになった。

しかしなお大多数のもの全統一戦線の一翼化傾向より、むしろ在来型の協同組合に執着する少数者が、別個に、小規模の Co-operative Congress をグランド・ナショナル最高潮の 1834 年 3 月バーズリに開いたと見られる。(新第七回)。これがグランド・ナショナル潰滅後も生きのこって一年間隔で 1835 年 4 月ハリファックス・kongress (新第八回) となったが、これはやがてオウエンの New Moral World 実現を目標とする 1835 年 5 月 1 日結成の Association of All Classes of All Nations に吸収されて終ったと見るべきであろう。

従来の通説を排して私は次のごとく第 1 表にする。

[第1表] Co-operative Congresses.

回数	開催地	年月日
1st Congress	Manchester	May 26, 27, 1831
2nd Congress	Birmingham	Oct. 4-6, 1831
3rd Congress	London [I]	April 23-May 1, 1832
4th Congress	Liverpool	Oct. 1-6, 1832
5th Congress	Huddersfield	April 8-10, 1833
6th Congress	London [II]	Oct. 7-12, 1833
7th Congress	Barnsley	March 31-April 4, 1834
8th Congress	Halifax	April 20, 21, 1835

なお、既述の Axel Gjores のオウエン論巻末の書目 (p. 235) には次の二つの議事録が出ていることは注目に値いしよう。

1] *Proceedings of the Seventh Congress of Delegates from Co-operative Societies in Great Britain and Ireland*, Barnsley, 1834.

2] *Proceedings of the Eighth Co-operative Congress, held at Halifax. 1835*, Halifax, 1835. この二つによって当時の Congress 当事者が Barnsley を第七回、Halifax を第八回として開催したことを確信しうる。(ホリヨークもコールもこの文献を知らなかったらしい。) ロンドンの General Congress of Delegates of Co-operative and Trades' Union を第六回と数えていた傍証と見、私見を裏づけられたおもいがする。

終りに特記すべきは、この8回にわたる Congresses のうち第一回を含めて5回までが、ランカシャーとヨークシャー・ウエストライディングで開催されたことである。1844年の Rochdale Pioneers もランカシャーだが、それ以前の1820年代30年代にすでに協同組合運動は花をひらいていたのである。A. E. Musson, *The Ideology of Early Co-operation in Lancashire and Cheshire (Trade Union and Social History)* London, 1974, p. 173 などを見よ。

7. Co-operative Congress 経過史への覚書

前節コングレス経過史の重要な修正にかんして書きのこしておきたいことがある。

昭和13年(1938年)10月東北帝国大学で開かれた社会経済史学会第8回大会で五島は研究報告し、この全貌を詳しく発表した。その最初の部分は翌1939年6月の大阪商科大学(現大阪市立大学経済学部)『経済学雑誌』4巻6号に「1830年代初期の協同組合運動」[近刊の五島『ロバート・オウエン研究』第六章に所収]として発表した。(特に同号 pp. 84-87 を見よ。)これは発表当時におい

て内外を通じて正しく「創見」であった。しかし五島統稿は発表されなかった。ところが1939年G. D. H. コール教授が Amsterdam の国際社会史研究所編の *International Review for Social History*, Volume IV, Leiden, 1939, pp. 359-462 に “A Study in British Trade Union History. Attempts at General Union, 1829-1834” を発表。のちに増訂して単行書 *Attempts at General Union. A Study in British Trade Union History, 1818-1834*, London 1953 を出版された。その第10章 pp. 90-92 にコール教授は以前の『オウエン傳』(*Robert Owen*, London 1925) での混乱 [例えば、p. 197 に三回までの Co-operative Congress をあげ、半年毎の開催と注をしておきながら、その後は kongress の名はなく、p. 211 に第二次ロンドン・kongress も大同団結母体の Conference として打出し、次回は1834年3月31日 Barnsley 開催と記す。これは第七回 kongress であることというまでもない。] を改めて、私の説とほぼ同一の見解を示された。すなわち *Poor Man's Guardian*, Oct. 19, 1833 の Co-operative and Trades' Union Congress の記事をかけたあと、この1833年10月の London Congress が「第六回であった」とし、「しかし、それは一つの “extraordinary” Congress となった。Co-operative Societies のほかに Trades' Union が招かれたからだ。またその目的が一つの総括的な “Grand General Union” を設立するにあったからだ。」これがおそらくホリヨークが初期の Co-operative Congresses の彼のリストからそれをオミットしている理由である。しかし彼は彼のリストの中に1834年3月、4月にバーズリーに催されたシリーズの次を含め、それを第六回とよんでいる。そして彼もまた1835年の Halifax Congress を第七回として含める。その後、運動の崩壊とともに Co-operative Congresses は終わった。翌月 Owen 主義者たちはロンドンに Association of All Classes of All Nations を設立した。それは全国のいろいろな部分で Annual Congress をもちつづけた。1846年にオウエンの Queenwood Community の崩壊まで。(Cf., Holyoake, *op. cit.*, p. 137.)

なおコール教授は雑誌論文と単行本とのあいだに既にロッチデール公正開拓者組合百年記念出版の *A Century of Co-operation*, Co-operative Union, Manchester, [1945?] p. 27 に第一回から第八回までの Co-operative Congresses の開催地と年月を略記して明らかにし、つづいて第六回(第二次ロンドン)の労働組合運動への重要性を指摘している。この書の執筆と出版についてのコールの不満はマーガレット・コール夫人の著『コール伝』(*Dame Margaret Cole, The Life of G. D. H. Cole*, London, 1971, pp. 256-7) に詳しいが、この点の内容は変わらない。ともあれ爾来そのコール教授の説が新通説となったと私は見る。「創見者」であった五島茂として若干の感慨をこめてこの事実を書きとどめておこう。

8. Co-operative store

さきに述べた Co-operative Congresses を形成したハリスン教授のいわゆる三つの institutions の第 1 の Co-operative store についてまず述べよう。

1827 年 9 月 9 日オウエンは「ロンドン協同組合」(London Co-operative Society-1824 年創立)の朝食会で講演。その朝の日曜紙 *The Sphynx* に掲載された同紙の 9 月 7 日付署名寄稿。“Address to the Agriculturists, Mechanics, and Manufacturers”⁽¹⁾ をまず読みあげた。これは故国の 1825 年恐慌以後の労働大衆の窮乏分析を試み、労働紙幣の採用を勧告しつつ、その窮乏の最深の被害者たる労働大衆に appeal したものだ。朗読を終わってオウエンは言った。「労働者階級は 4 家族から 20 家族の Communities を作ることによって、容易に彼らの現在の嘆かわしいみじめな状態から speedily に彼ら自身を救い出すことが出来る。大資本の必要はない。勤勉と正しい行いと相互の信頼は彼らの成功を確かに保証するのだ。」⁽²⁾ と。

千人をこす聴衆の熱烈な喝采がオウエンを包んだ。オウエンの眼底にはまだ広漠たる New Harmony の世界が、その失敗にもかかわらず、オウエン自身にはまだ失敗とおもわれず、幻のように顕ちわたっていたが、同時にそのような巨大な Community building のむずかしさが骨身にこたえていたろう。のみならず New Harmony も後期になると、大きく New Harmony としてしめくられていたものの、内実は小 Community の幾つものが半独立形態をとっていた。そのために「4 家族から 20 家族の Communities」という言葉がはしなくもオウエンの口から出たのではないか。それが協同組合のつくる Community のパターンとして現実性をもって来たのか。その数ヶ月後の *The Co-operative Magazine* (London), Vol III, No. 1, January, 1828, pp. 9-11 に掲げられた Rules and Regulations for an Independent Society or Co-operative Community, to be formed on its own Land, in the United States of North America: subject to such alterations as a majority of the members may determine upon の第二條、That at the commencement of this Society, it shall consist of from 20 to 40 families, exclusively of single members と共通しており、その可能性をオウエンが認めているようにおもわれるのだ。これはつとに述べた労働者の小規模な Spaffield の Mudie 型 Community と同傾向のものを勧告したことにもなる。オウエンは New Harmony の実状から、いぶかしくも一時有産者等の寄附に俟つ従来の巨大計画 Community の理想主義を棄てて、さしずめ可能の現実主義についたのであろうか？ 小コミュニティを主張する William Thompson と従来の巨大計画に復帰していたオウエンとの Community 規模論争一殊に 1831-32 年の Co-operative Congresses での激突を考えると、上の講演とこの規約第 2 條は特に注意をひくものである。

(1) 五島『ロバート・オウエン著作史』第 1 巻, No. 62, pp. 160-63. 第 2 巻, pp. 45-46.

(2) *Co-operative Magazine*, Vol.II, No. X, October, 1827, 446.

9. オウエン派労働者の主力

Asa Briggs 教授⁽¹⁾ はチャーティストの地方史的研究の中で Chartism に三つの異質的労働力の主要群を見、チャーティスト運動史の主要テーマはこれら三群を一つに結びつける階級 Unity のセンス創造の試企だとした。それは

(1) superior craftsmen—都市労働者の知的な有力な部分。

(2) factory operatives—Lancashire, Yorkshire, West Riding, Cumberland, Derbyshire, Wales, 西部イングランドに集中。

(3) domestic outworkers—手織工や杵職人や釘製造工の如き生産者を含む。—

の 3 groups であり、第一群に属するものとしては印刷職人、くつ直し、洋服職人、家具師、本屋、小店主をあげた。私見をもってすれば、階級一体意識も、階級そのものとしての意識化も、むしろ 1830 年代初期の協同・労働組合運動の波の中に求むべきものとおもう。工業化の進行の生んだ近代工業労働者群と熟練アーティザン群とを混有するものが、いわゆる労働者階級 working classes, working men なる階層の主力を形づくっていた。この複数の working classes が単数化して working class となったのはいつかは重大な問題である。Thompson のいうように、1832 年 Reform Bill の時期であるか？これを少しずらして、1833-'34 年の Grand National の時期と見るのが私の年来の主張である。ただしその場合でもはっきり単数化したのではなく、現実には工場労働者と Artizan の混有がずっと後までつづき、それが広義のオウエン派労働者の主力となったと見た方がいいと私は現在もおもっている。

10. 協同組合の発展

1827 年 Dr. William King のはじめた “Brighton Model” の Co-operative Trading Association の成功によって各地に同じ型の協同組合の急増を見た。ロンドン協同組合もそのゆき方に刺戟されてストアを開いたことは既に記した通りである。しかしこのブライトン・モデルも、実はかの Mudie 型に酷似していて、ストアの開設、住宅、失業者の協同生産とともに、‘a self-supporting home colony of united interests’ という community 樹立を目的とし、その community の資金を

(1) Asa Briggs (ed.) , *Chartist Studies*, London, 1959, pp. 4-9.

協同店舗で調達するのが目的だったのだ。1828年5月結成の Dr. King の Brighton Co-operative Benevolent Fund Association、数ヶ月後の Brighton Co-operative Trading Association と彼の発行した機関誌 *The Co-operator* (1828-'30) の成功はきわめて顕著で、King は「Co-operation の最初の主唱者」⁽¹⁾ といわれる。特にこの機関誌はひろく読まれ、多くの地方で協同組合のハンドブックになった。はじめの方の号では協同組合数わずか4であったが、1830年8月1日の終刊号 (No. 28) の終刊の辞の結びには協同組合現在教 300 をこえるという記事がある。

[第2表] 協同組合の数

年 月	組合数
1828年 5月1日	4 ⁽²⁾
11月1日	7
1829年 1月	12
3月	31
4月	56
5月	63
8月	70
11月	120
12月	130
1830年 2月	172
4月	226 ⁽³⁾
8月	300
10月	400-500 ⁽⁴⁾
1832年 6月	400-500 ⁽⁵⁾
8月	700 ⁽⁶⁾

(1) その覆刻は T. W. Mercer (ed.), *Mr. William King and "The Co-operator", 1828-30*, Manchester 1922. ほかに Pollard, *Dr. William King of Ipswich, a Co-operative pioneer*, Co-operative College Paper number six, April, 1959. なおブライトン・モデルについては Rose, *op. cit.*, pp. 40-41.

(2) 以下 *The Co-operator* 各号から Booth の作成したものを補訂。(A.J. Booth, *Robert Owen*, London, 1869, p. 139)

(3) (4) British Association for Promoting Co-operative Knowledge の数字 (Garnett, *op. cit.* p. 56.)

(5) *The Crisis*, Vol. I. Nos. 15 & 16, p. 59.

(6) *The Crisis*, Vol. I. No. 31, p. 135.

(補注)なお 1830-33 年頃の協同組合は Holyoake, *History of Co-operation*, Vol. II. No. 34, pp. 476-79 に詳しい表があり、265 組合をあげているが、そのリスに入れてある Paris (1821), Marseilles (1830), また Indiana (1826), New Jersey (1826) の如き、仏、米の組合を省き、参考のためとする 1836, 1839 年のものも省き、p. 477 所掲の London (1830-1833) の 46 組合、p. 476 所掲の Manchester & Salford (1829 と 1830) の 10 組合と、如上の表とを対照補訂すると 1831 年までの分 125 組合、1833 年までの分 254 組合となる。ただし諸団体に連絡しない協同組合も多数あったと想像されるので、組合の実数は実はとらえにくいというべきかもしれない。ただ発達のトレンドは明かだと見られるのである。

協同組合のかかる急増は、産業資本制確定過程の必然的に惹起した労働大衆の生活難に基底をおく。その打開策の模索に協同組合という制度がつよく appeal したのだ。労働者たちの手のとどく加入金と週何ペンスの少額の醸出金による組合参加が、消費生活面の協同による利益、利用高払戻 (dividend on purchase) — 利用高払戻は Rochdale Plan の主項目の一つだが、これは Alexander Campbell (1796-1870) が 1831 年に出版した *Address on the Progress of the Co-operative System* の中ではじめて主張したものという。これは彼自身が後年明記している。Cf. *Transaction of National Association for the Promotion of Social Science*, 1860 (1861) p. 874, His Letter 1865 published in *Co-operative Educator*, (October 1920). また John Saville, Alexander Campbell, *Dictionary of Labour Biography*, vol. 1, London, 1972, q. v. これとは別に 1826 年 1 月創立の The Sussex General Co-operative Trading Association がこの制度を行っていたという説もある。The *Co-operative Magazine*, Feb. 1828: Garnett, *op. cit.*, p. 51. — 卸売取引、labour exchange など、つとに運動の知恵の生み出した方式の採用、のみならずストの場合、解雇含みや現実失業の労働者の生産組分的協同による自己生産の実施。これら種々のルートを通して彼らを協同組合結成に駆り、またすでに結成された組合の強化をもたらした。運動のリーダーも生まれた。すでに 1829 年 5 月ロンドンに創立された「英国協同知識促進協会」(British Association for Promoting Co-operative Knowledge) もこの上向傾向に一つのバネの役割を演じた。これはパンフレット発行、講演など一種の運動啓蒙の宣伝機関だが、やがて 1830 年には機関誌 (*The Magazine of Useful Knowledge and Co-operative Miscellany*) を創刊し、協同組合情報部 (Co-operative Missionary) を組織した。W. Pare はイングランド北部、James Watson はヨークシャー全域に派遣され、いずれも協同組合設立を勧奨してまわった。同年 4 月までに同協会の個人会員 639。加盟組合 226。創立時 125 の倍になった。グラスゴウ発行の *Herald to the Trades' Advocate and Co-operative Journal*, No. 3, Oct. 9, 1830, p. 39 の記事 Co-operative System に「この制度は全国にわたってその勢力を拡げつつある。Co-operative store のない村はほとんど無く、全国の幾多の町では一つの町に多数の組合が存在している。幾多の協同組合情報部がいまや国じゅうをまわって労働者階級にこのシステムを説明し、自分のことは自分ではじめるよう熱心に説いている」。彼らはオウエンやその信

奉者たちのつくった書籍やパンフレットの多くを読んでいたのは明白だ。初期の *The Co-operative Magazine*, *The British Co-operator*, *The Free Press*, *The Associate* その他の出版物もよんでいた。*Brighton Co-operator* や *The Birmingham Co-operative Herald* のような初期の地方的協同組合雑誌から、彼ら自身の宣伝機関誌が発達した。*The Chester Co-operator* (1830)、*The Lancashire Co-operator*, のちの *The Lancashire and Yorkshire Co-operator* (1831) を、*The Liverpool Bee* (1832-3) を、他方協同組合主義は地方労働組合雑誌たとえば *The United Trades' Co-operative Journal* (1830), *The Voice of the People* (1831), *The Poor Man's Advocate*, *The Union Pilot and Co-operative Intelligencer* (1832) にも支持された。とくにマンチェスターは運動の中心となった。そこや周辺からひろがっていったセンターだった。それは Manchester and Salford Association for the Promoting of Co-operative Knowledge. もっと短かな名称で Manchester and Salford Co-operative Council. これは 1830 年 4 月に設けられた中央委員会で始まった。そして *Lancashire Co-operator* を創刊したのだ。Co-operative Congress はこの背景から第一回を生み出したのである。しかしここの大衆や指導者の協同意識のレベルはいろいろ差異がある。けれどもわれわれは、Co-operation の中心がロンドンやブライトンから、1830 年-'31 年になると明らかに、イングランドの北西地帯に、いいかえれば産業革命の中心地域に移っていった現実を直視せねばならない。それより更に重要なのはオウエンと一般労働大衆の交響という貴重な動きであろう。オウエンをめぐる小宇宙の微妙な揺れである。この場合の階層はこうだったのである。

(1) Owen

(2) Owenites—オウエン主義協同組合のリーダーたち

(3) rank・and・file 層

の三つの階層を考え

その (1) → (2)

(2) → (3)

(1) → (3)

この複雑な人間関係の交流・交渉を見よ。殊にその (1) と (2) の見解が対立した場合 (たとえば W. Thompson, E. T. Craig, William Pare, と Owen) が、1830 年代初期をつらぬいて、するどく、ややこしくからみあいのひろがったときなど特に注目する必要があると私は強調したい。オウエンが彼の真実の声を—とくに Community の新社会等々について—リーダーたちを飛びこえてランク・アンド・ファイル層に彼の口から筆から直かに appeal しようと焦慮し、切々たる仰望の声を放った事実は瞠目すべき現実であった。オウエンにもランク・アンド・ファイルの大衆にとっても。日曜講演の 12 回分を 10 分冊で出版した "*Lectures on an Entire New State of Society.*" ⁽¹⁾ *Co-operative Miscellany* 編集者はこれを Owenism の「テキスト・ブック」(「基準参考書」)と推奨

(1) 五島『オウエン著作史』No. 73, pp. 187-189.

したという。また *Outline of the Rational System of Society*.⁽²⁾ これは12頁の小冊子ながらも、最も要領よく書かれ、やがて‘Social Bible’ともいわれて、その後20年にわたって11種の版をかさねたベスト・セラーになった。こうしたものの公刊によっても大衆の感動的状況が察せられる。

しかしこのころ Community にかんしては、一方で William Thompson あの *An Inquiry into the Principles of Distribution of Wealth most Conductive to Human Happiness*, 1824 や *Lalour Rewarded*, 1827 によってオウエン主義でありながら、理論的には密度のあらいオウエンを超えた著作によって次第に揺るぎない地位を占めた Thompson がオウエンの Community を内在批判する形で、*Practical Directions for the Speedy Establishment of Communities on the Principles of Mutual Co-operative, United Possessions and Equality of Exertions and of Means of Enjoyment*, 1830 を出して来た。これは強烈な反響をすどくオウエン世界に、協同組合の深層にひろげていったのである。運動進展の基軸と見られる第一回 *Co-operative Congress* はかかる動きの波濤の中に滲透していった。ランク・アンド・ファイル層にとってなおオウエンが生きた信仰の対象である情勢のなかで。しかし1831年オウエンのこの敵手 William Thompson は夭折してしまった。

11. Labour Exchange と *The Crisis*

第二の‘institution’は Labour Exchange. オウエンのいわゆる人間本位制を導入し、労働紙幣 (labour note) に表示した労働時間によって、産業資本制を基底づけている金銀貨幣制度の誤謬を剔抉してその対置社会の主要機構の一つとして、偉大なる “National Equitable Labour Exchange” が1832年9月に開設されたときは、充分な自信を以て実行にうつされたのである。その内容・その実現諸法事態についてオウエンの機関誌 *The Crisis* 全4巻 (1832-1834) については、五島『オウエン著作史』第1巻, pp. 199-202, 202-240 (写真も掲載) を参照されたい。*The Crisis* は主題を二分。第一部が Labour Exchange、第二部が Grand National を特に扱っている。

The Crisis

[所在]

(2) 同上, No.74. pp. 190-198.

1] Vol. I:—

a) B. L. P. P. 3390 (合本)

b) G. S. L. A 30.2 (合本)

(大きさ) 26.9 cm×21.1 cm.

c) Bishopsgate Institution Lib.

d) N. L. W. HX. 641. III.

(大きさ) 28.2 cm×21.5 cm

(注意) ただし; Vol. 1, Nos. 1-44. p. 176 までのみ、No. 33, 欠. pp. 52-54 欠. しかしこれは印刷のあやまりか? また pp. 61-64 が重複している。

▲ [米国] Vol. I, Library of Congress HX 1, A. 14 CA 5-1348

2] Vol. II:— (特に『著作史』第1巻, pp. 210-211, 日本 (合) 4+1. 参照。)

a) B. L. (合) (ただし. Vol. II, No. 6 欠)

b) G. S. L. (合)

3] Vol. III:— (特に『著作史』第1巻, pp. 216-217, 第2巻, p. 71 参照。日本 (合) 3+1.)

a) B. L. (合)

b) G. S. L. (合)

4] Vol. IV:— (特に『著作史』第1巻, p. 235. 第2巻, p. 1 参照。)

[本邦における所在]

1] IV のみ. 屋島本

2] Vols. I-IV. (一橋大学社会科学古典資料センター. 貴 A 292)

12. Grand National (1)

イギリス産業革命展開期 1829-1834 年のイギリス労働組合運動史の「革命期」は「全国労働組合大連合」(Grand National Consolidated Trades' Union—通常グランド・ナショナル、あるいはコンソリデイテッド・ユニオンと略称。)をその尖頂とする。それは Trade Union ないし Trade Club と称せられた各産業部門の個別組合ないし全国的組合のごとき野心度の低い穏健な、Webb のいわゆる “Old Unionism” に対比した尖鋭な “New Unionism” で、はじめから代議員 (delegate) 制を

楔とするピラミッド型の全産業部門別各労働組合の横断的全国連合体、いわば全労働組合大同団結なる大労働組合主義を意味する The Trades' Union である。指導者 Robert Owen のいわゆる「全労働階級を巨大組織に包含する全国的団結」によって、暴力革命でなく協同社会主義原理に基づく革命的結合により、「偉大なる」社会経済変革を期した「レヴァイアタンの」活動基体であった。グランド・ナショナルの成立年代確定の問題には諸説がある。筆者はつとに次の論考を発表している。

五島茂「グランド・ナショナルの成立」(一)(二)(三)、『社会経済史学』第19巻第6号、第20巻2号、3号、1953-54。近刊の五島、前掲書、第八章に所収)。

筆者は真の結成は1833年10月の第二次ロンドン Co-operative Congress であり、そこで Grand National Moral Union というより「グランド・ナショナル組織」なる名称で呼ばれたこと、またこれが Grand National Consolidated Trades' Union として公然たる巨姿を社会の前に現わしたのは1834年2月のロンドンにおける特別代議員会議で、公式的にそこでその綱領規約が討議されたという見解をとり、⁽¹⁾ いわば1833-34年説というべき立場である。

1833年10月5日の *Poor Man's Guardian*, No. 122 は、当時の進歩的夕刊新聞 *The True Sun* 紙よりの拔萃をかかげ、「全国の労働階級が今や、秘密ではあるが、ある重大な諒解によって、普通以上に活動的である。ひとつの新しい Trades' Union はすでに結成された。—その大組合の組合規約 (the objects and laws) は組合加盟者のみに厳に限定されているが、われわれは信頼すべき筋からの情報として組合員すでに80万人を越えたことを知る」と報じた。‘A new Trades' Union’として、その名は伏せてあったのに対し、すぐあとの10月7日-12日の London Congress でオウエンが Grand National Moral Union of the Productive Classes とその構成を提案したとき、オウエンはすでにその母体としてこの ‘A new Trades' Union’ を考えていたと想像していいのであろうか。*Poor Man's Guardian* の前掲80万という記事を信頼するならば、これは Trades' Union として未曾有の規模であり、むしろ既に存在していた各 Trades' Union を打って一丸とする文字通りの大同団結の存在をおもわしめ、そこにこそオウエンの宿望ともいえる大同団結提唱と照応するものがあり、それを Grand National Moral Union of the Productive Classes の組織と名称のもとに統括することを強調したと見ていいのではなかろうか。Co-operative Congresses のリストと筆者の *The Crisis* から発見した第二次 London Congress の意味と至深な内包についてはすでに記した。

さて Co-operation の名のもとに協同組合と労働組合を一丸とする idea はこの第二次ロンドン・コンGRESSで巨きく打ち出されてきたが、いつ頃からオウエンの胸裡にこの idea が浮かんだかは至要な難問題である。オウエンの協同思想はしばしば言及したごとく、元来弾力性、包攝性、極言すれば、茫々漠々としたむしろおもしろいような伸縮性をもっていた。その故に未成熟の労働者階級(その内層分析はすでに行ったが)も前衛分子にもそれぞれのニュアンスをもって滲透しえたのだ。かかる精神面と併行してオウエンが労働者階級を掌握する底力を作ったのは、前節でふれた

(1) 五島『イギリス産業革命社会史研究』(1949年、日本評論社。)24-30頁。

Labour Exchange (National Equitable Labour Exchange) であった⁽²⁾。それは London のみならず Birmingham や Scotland でも開かれ、「労働紙幣」による生産物バザーのほか、ストで lock out された労働組合員の協同生産にも及んだ。それは労働者自主を培った。1833年4月8日 Huddersfield での第五回 Co-operative Congress でオウエンは Yorkshire 地方の人々と接触し、同地方の運動形態をつぶさに視た。「この時オウエンの心中に Grand General Union の胚種を生んだらしい」とはコール説⁽³⁾だが、証拠資料は示されていない。この Congress の席上ロンドン代議員の Turner から「次にすべきは何か？ それは全国を通じての労働者階級の a general union だ。このグロリアスな公正な大義の達成……にすべては向う」という発言はすでに述べた所だ。「交流と団結を媒介として彼ら自らのことの処理によって労働者階級の自己解放の期待……」を説いたといったことも。⁽⁴⁾ しかしわれわれはオウエンが *The Crisis* の副題を変えて “National Co-operative Trades' Union and Equitable Labour Exchange Gazette” とした事実を特に注目したい。*The Crisis*, Vol. II, No. 16 (1833年4月27日号) から Vol. IV, No. 20 (1834年8月23日号) までである。すなわち、オウエンは協同組合を全国協同労働組合 (National Co-operative Trades' Union) と見た。かかる表現の変更に私はむしろ重大な胚種を見たいのである。協同組合と労働組合の合体を意味し、これこそグランド・ナショナルをいち早く示唆していると思う。その後半年 *Poor Man's Guardian* はいう。「団結のスピリットは労働者階級の間にも未曾有の度で生長した。生産階級のために彼ら自身の勤労の果実への完全支配を樹立する一つのグランド・ナショナル組織」と。

オウエンは労働組合やその支部の結成を訴えたのではない。全生産階級のあらゆる部門に参加を呼びかけたのだ。全労働組合および諸 Trade Union、全協同組合、全オウエン主義宣伝団体の各代議員が集まった。彼が長い間夢みていた 'New Moral World' を急速に一打で樹立しようという試みに参加する用意のあるあらゆる階級のあらゆる人々すべてを包含するに足る一組織をオウエンは心に思いうかべた。「今や偉大な変革が企てられつつある。」それは「夜盗のごとく (as a thief) 突如、社会に出現する」という 1820 年代のオウエン自身の口吻を、彼はここで再び三たび口にしている。

ロンドン・シャーロット街の「全国衡平交換所ビル」での Congress はオウエンが座長席にあって司会した。その3日目の200人の聴衆への講演で彼は「Grand National Moral Union of the Productive Classes of the United Kingdom」を発表、承認をえた。⁽⁵⁾

その実行のために宣伝旅行や起草委員会その他も選ばれた。「コンGRESSによって彼ら労働階級に勧告 (recomend) された GRAND NATIONAL ORGANIZATION を充分考慮することを懇願する」と述べる。

この計画は機構等は別として、オウエンの主張する生産階級には労使共に入る。抵抗を起す場合

(2) 五島『著作史』第1巻、199頁以下。

(3) Cf., Cole, *Attempts*.

(4) *The Crisis*, Vol. II, No. 17, May 4, 1833.

(5) *The Crisis*, Vol. III. No. 7 & 8, Oct. 10, 1833, pp. 56-64.

でも、この大組合を通じて平和裡に抵抗する。これを支持して全員が協同闘争をする。これらの協力によってグロリアスな革命が起り、新社会が始まるというのだ。その後のオウエンの努力はこの方面の推進であった。しかしこの時をグランド・ナショナル組織体の成立と見ていいかといえ、これ以上は証拠はない。

筆者は一般の挑発新聞記事とちがいで、労働運動紙として最も信憑しうる *The True Sun* 紙のこのころ以後の分を 1931-33 年 4 月大英博物館（英国図書館）コリンデイル（Hendon）新聞分館ですべて検索したが何もえられなかった。Webb の 1834 年 1 月説の根拠もそこには無かった。*The True Sun* 紙がむしろ当時の急進派と緊密な関係にあつて、その主張の上からグランド・ナショナル成立を報道しなかったと考えられなくもないが、これは同紙が幾度かの処罰を受けつつも Whig 内閣の内幕曝露・労働者の主張を続けた点からみて、肯定し得ない。

むしろグランド・ナショナルの場合はメンバー以外に対しては嚴重に秘密主義をとつたと考えられるので、*The Pioneer*, *The Crisis* の機関紙、半機関紙以外に事後掲載をするほか、わざと一般には掲げなかったのではないか。グランド・ナショナルは Grand National Moral Union を表面にする秘密母体で、下準備を全部そこで行い、方々に支部 (Lodge) ないし大支部 (Grand Lodge) 等々を作って、二月の代議員会議に至つてはじめて、名称も決定、活動も表面に出たと考えていいのであろうと私は思う。ともかく、1833 年 10 月以後の騒然たる動きにも秘密をまもつた。例えば、11 月に起つて激化しつつ、遂に 2 月のグランド・ナショナルの表面化の直接契機をつくつた 'Derby Turn Out' や、Trade Union 否認弾圧の資本家側（いろいろな 'document' に見られる）、それらを擁護する Melbourne 卿の Whig 内閣の圧迫、こうした渦中にあつて労働組合は自分の身をまもるために、この秘密方針（それは Yorkshire に先例が多いように思われる）は各地の集会や組合機関誌や友誼団体などで嚴重に守られ、その中で、流行の合言葉として Grand National Organization, A General Trades' Union の存在が言及され、活潑に論ぜられた。前進横溢。しかもなお 'Trades' Unions' と複数が使われて、全部統一に至らなかつたのも事実であつた。1834 年事態深刻。2 月 22 日の *The Crisis* はその前日オウエンが生産者に appeal して全 Unions の a consolidation を絶叫し、彼らは one man のごとくに前進せよと述べ、17 ヶ條から成る大憲章を提示した記事を掲げた。"The Charter of the Rights of Humanity" といわれるのがこれであることを銘記しておこう。2 月 13 日-19 日の Trades' Union Delegates の特別集会。ただしこのときはあまりに Trades' Union 中心に偏したため、半年前のものとちがつた反響であつたという。1834 年 2 月 18 日建築工組合機関紙 *The Pioneer or Trades' Union Magazine* が執行委員会の賛成を得て公式の機関紙となり、2 月 22 日第 25 号から紙名を *Grand National Consolidated Trades' Magazine* と明白に命名。発行所を Birmingham から London へ移転した。

13. Grand National (2)

グランド・ナショナルについて、錯綜した成立史（前述小稿）を含め、グランド・ナショナルの全貌について私は、1949年夏学期東京大学経済学部非常勤講師として出講。関係第一次資料を提示しながら「ロバート・オウエン研究」を講じた。すなわちグランド・ナショナルに関しても、その成立から崩壊までを詳細に論じた。しかし多忙のためグランド・ナショナルも続考を印刷して論考として発表せず残念ながら空白のままであった。その後幸いに浜林正夫教授が「グランド・ナショナルの崩壊」の精密をきわめた好論考を公表された。⁽¹⁾ 以下の部分はそれに負う点が多い。

教授はまず五島論文（「成立」）からの空白の10年後の1964年、*Economic History Review*, 2nd Ser., Vol. XVII, No. 1, p. 95にW. H. Oliver, The Consolidated Trades' Union of 1834が公表されたことを指摘し、その紹介からグランド・ナショナルそのものの価値評価にまで触れておられる。

さて私が上の講義の際にも提示した一次資料の中の最大のもは、1931-34年イギリス留学中ロンドンのMuseum Book Storeで実に幸運にも入手したグランド・ナショナルの「規約」(*Rules and Regulation of the Grand National Consolidated Trades' Union of Great Britain and Ireland, instituted for the effectively enabling the working classes to receive, protect and establish the rights of industry.*)であった。これはすばらしい英国流装釘製本の端麗本であった。グランド・ナショナルの「規約」には二つあり、ひとつは1834年2月13日から19日にかけて行われた結成大会の議事録に付された「予備的條項」(preliminary articles)であり、もうひとつが上述の「規約」(Rules)である。「予備的條項」は*The Pioneer*, 1834年3月8日号 pp. 234-236に収録されており、G. D. H. Coleの*Attempts at General Union*, London, 1953, Appendix 8にその抜萃がある。幸いにも、その主要部分の邦訳としては都築忠七編『資料初期社会主義：オーエンとチャーティズム』平凡社、1975年、193-198頁、II. 8.「全国労働組合大連合の成立」(見市雅俊訳)がある。

「規約」の方は*The Pioneer*には収録されていないが、ウエップ夫妻の『労働組合史』(改訂版1920年)の附録(二)とコール、前掲書の附録(七)によって見る事ができる。この「規約」は日付不明であるが、「予備的條項」の最後のところに、組織上の規約については、執行委員会の監督のもとでなるべく早くこれを作成し、そのコピーを各ロッジへ送ると書いてあるから、それがこの「規約」であることは間違いのないことといえよう。しかしこの「規約」がいつ制定されたのかは明白ではない。コールは「規約」も「予備的條項」とともに1834年2月の結成大会で採択されたとみているが、これに対して、両者のくいちがいを指摘してコールを批判したA. Redfordの書評(*Economic Journal*, Vol. LXIV, July, 1954 p. 395)があった。Redfordによると、「予備的條項」が*The Pioneer*を執行委員会の機関紙として指定しているのに対して、「規約」は'*Gazette*'を機関紙としているが、『ガゼット』(*Official Gazette of the Grand National Consolidated Trades Union*)が機関

(1) 浜林正夫「グランドナショナルの崩壊」、『一橋論叢』82巻4号、1979年10月。

紙となったのは1834年6月のことであった。またオリヴァーは前掲論文で更にこれに加えて、「規約」には「予備的條項」にあった Derby のストライキ支援のための1シリング抛出金の規定がないこと(ダアビイのストは4月にすでに終熄している。)、*Gazette* は6月にその「最初の、そしておそらくは唯一の」号を出していることをあげ、「規約」はグランド・ナショナルの崩壊する少し前に制定されたのではないか、と見ている。このように「予備的條項」と「規約」の制定の間に時間的ズレがあるとすれば、その理由を検討することもまた一つの課題となりうるとの見解を浜林教授はとられている。

14. Grand National (3)

グランド・ナショナルの機構そのものには不透明なところが多い。「予備的條項」にしても組織上のこまかい規定はなく、むしろ設立趣旨と基本方針を示すにすぎず、組織上の基礎組織はロッジと呼ばれるもので、地域ロッジ (District Lodge), 支部ロッジ (Branch Lodge), 地域混成ロッジ (District Miscellaneous Lodge), 勤労女性ロッジ (Lodge of Industrious Females) などという表現が見られる。ロッジという用語はもとフリーメイスン組織のものであるが、友愛協会や労働組合でもひろく用いられている。これら諸ロッジという基礎組織が相互にどのような関係をもつかは「予備的條項」にはまったく示されていない。それは「なるべく早く」制定さるべき「本規約」に委ねられたのであろう。「規約」に示されることになっていたグランド・ナショナルの機構は職業別組合の、地域ごとの連合体、および全国的な連合体の連合という複合的性格のものである。すなわち職業別組織としては、それぞれの職業がそれに最もふさわしい町に「本部」(Grand Lodge)をおき、各地にその職業に従事する人びとによって構成される地域ロッジをおき、もし必要があれば、地域ロッジの下に更に支部ロッジをおくという縦割り形態が考えられている。もしある職業に従事している人々が、ある地域では余りに少数で、ひとつのロッジを構成し得ない場合には、他の職業の地域ロッジに加盟することも認められ、あるいは幾つかの職業に従事する人びとが集まって地域混成ロッジを構成することも認められる。(オウエンがグランド・ナショナルに加入したのはロンドン混成ロッジへの加入を通じてであった。)また、生産的階級を支持し、援助しようとする人びとは補助ロッジ (Auxiliary Lodge) を組織することができるとされた。

グランド・ナショナルは全国的な職業別組合の代表によって組織される全国的連合組織であるが、各地域においても各職業別組合の地域ロッジの代表によって中央委員会が作られ、地域ごとの連合組織が構成される。したがってグランド・ナショナルは職業別全国組織と地域別連合組織との二重の連合体ということになるのだが、しかしこの組織の運営の機構を見ると、グランド・ナショナルの最高決定機関である代表者会議 (Grand Council of Delegates) (半年に一回開催) を構成す

るのは職業別全国組織の代表ではなく、地域連合体の中央委員会の代表と見られているから、二重の意味の連合体といっても、地域連合体の方が組織的には中心となるとみていい。職業別全国組織の方は、それがグランド・ナショナルを構成するといわれているものの（「規約」第6条）、全国組織の代表が運営に参加する機構にはなっていないのである。グランド・ナショナルの執行委員会（Executive Council）もこの代表者会議で選出されることになっている。オリヴァーはこのグランド・ナショナルの機構は、建築工組合（Operative Builders Union）のそれにかなり近いといい、両者の主要な違いは執行部選出の仕方にあるとして、建築工組合は、これを構成する石工・大工・煉瓦工など7つの単組から執行部が選ばれるのに対して、グランド・ナショナルは代表者会議で選出されるといっているが、この違いは単に執行部選出方法の差ではなく、連合体の組織原理の差というべきであろう。グランド・ナショナルに先行した全国組織である John Doherty の「全国労働擁護協会」（National Association for the Protection of Labour）の場合には、規約上は、組合員1000名につき1名の代議員によって構成される一般委員会がこの組織の決定と運営にあたることと定められているだけで、代議員選出の母体については規定がないが、実際には地域連合体の代表と職業別組合の代表によって一般委員会は構成されたもののようである。

こういうあいまいな組織原理から、産業別全国組織である建築工組合の場合には、職業別組織を基礎とする連合体という方向へ傾き、全産業を包括するグランド・ナショナルの場合には地域組織を基礎とする連合体という方向に傾いていったといえよう。

もちろんこれは規約上の機構図だけのことであって、実態としては、グランド・ナショナルは地域組織の代表を結集したとはいえないが、しかし理念としては地域連合体の代表による全国連合体という考え方があることに注目しておきたい。

この点では全国労働擁護協会にも共通した考え方があるので未組織労働者を組織化するためにも、また地域単位で起ることの多かった労働争議に地域ごとに支援体勢を作る上でも、地域連合体の組織化は極めて重要な課題だったのだ。

「規約」の中で注目すべきもう一つの点は、労働争議に対する方針だ。「規約」第15条によると、賃銀引き上げのためのストには執行委員会の同意が必要とされるが、賃銀引き下げに反対する時は地域の中央委員会の決定のみでよく、これを支援するための課徴金も地域ごとの決定で行われ、要請があれば、中央の執行委員会の決定によって全国的な支援が行われる。支援額はスト中の組合員1名に対して、最高週10シリングとする。また「規約」第21条ではスト中の組合員を雇用して各ロッジが作業場または店舗を営することもできるとしている。

グランド・ナショナル結成のきっかけとなった資本家側の組合攻撃は、既述の Derby 争議として著名だが、それについて Tolpuddle 殉教者で知られる Dorchester 農業労働者弾圧事件がある。これについては五島茂の詳細な『イギリス産業革命社会史研究—Dorchester Labourers（1834—1840）事件の研究』（1949年日本評論社。）があるので参照されたい。ロンドンでの抗議の大デモは有名だが、オウエンはそのデモに反対したが一蹴された。オウエンと労働者の思想対立をいち早く

示すものとしても知られる。

グランド・ナショナルと資本家側との対立は日々激化して来た。

グランド・ナショナルに最後の打撃を与えたのは、結成当初からこの組織の中心となっていたロンドン仕立工のストとその敗北であった。

資本家側は仕立工がグランド・ナショナルの中心と見て、それからの脱退を、1834年5月に強制する決議を行い、これに抵抗して2万人がストに入った。その時のグランド・ナショナル執行部の対応が不十分だったことへの不満から仕立工組合は1834年6月にグランド・ナショナルから脱退した。

つづいて製靴工組合も脱退にふみ切ったのである。この二つの加盟組合が、ロンドンではグランド・ナショナル加盟組合員の少くも半数を占めていたため、グランド・ナショナルは1834年7月に事実上あえなく崩壊したのである。おもえば1834年2月結成以来わずか5ヶ月の短い生涯であった。8月始めに開かれたグランド・ナショナル代表者会議が解散大会になってしまった。この混乱をめぐって *The Pioneer* の主筆 Morrison、*The Crisis* の主筆 Smith はいずれもオウエンと思想対立を尖鋭化し、彼らのサンジカリズムに対して、オウエンはその職を免じて対抗した。思想的対立、その比較論議は至要な問題であるが、オウエンと対立したこの両主筆のサンジカリズムの力とオウエンの底知れぬスケールのひろさとの対比は別教訓も含むおもしろい。グランド・ナショナルは解散、オウエンは直ちに別の行動をおこし、オウエンを会長とする「産業・人道・知識のためのブリテンおよび外国合同協会」(British and Foreign Consolidated Association of Industry, Humanity, and Knowledge)に改組した。オウエンはその Grand Master に選ばれた。それはオウエンにとっては諸階級の調和による New Moral World 実現のための方向転換、むしろ一つの前進であったといえよう。

15. グランド・ナショナル (結び)

1831-34の英国の trade unionism 発展の入り組んだ物語はここに終わった。E. P. Thompson のいわゆる“くすんだ社会”(the opeque society)⁽¹⁾の一齣であった。オウエンの無産階級 Owenism の、労働組合 phase はここに終わった。⁽²⁾

“The meteoric rise and fall of the G. N. C. T. U. is one of the most colourful episodes in the early history of British trade unionism”とは John F. C. Harrison の言葉である。⁽³⁾

(1) E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*. Pelican Book 1968, p. 484.

(2) (3) J. F. C. Harrison, *op. cit.* pp. 211-212.

オウエンは、彼の social system — social science — の創始者としての講演の途中で仆れ、87年の長い活動の生涯を閉じることとなったが、文献としては、それを最終のものとしてのこした。文献学的研究の最後のものとして、それがのこされた。文献学的研究の最後のものとして五島の発見にかかることをしるしとどめた No. 584. は、『著作史』に精細な記録がある。そしてそれから死に立帰った故郷での葬式の始末は筆者が Newtown に 1932 年一ヶ月滞在しての「Owen の葬送」[近刊書第九章に収録]として発表した。interview をもとにしたものだ。五島が Newtown の生き残った故老との interview をもとにして Holyoake 等のあやまりを訂正したものである。足で修正した現地での所産である。

補説

東京大学経済学部図書館新購入の

Robert Owen Collection (1995)

東京大学経済学部は Owen と Owen をめぐる研究書をこの度新購入された。よろこばしい限りだ。

Robert Owen 自身の手紙・署名などの holograph の類。そこには National Equitable Labour Exchange の July, 22nd, 1833 の Ten-hour labour note など含まれて先ず胸をおどらす。

original texts を Robert Owen に限ってみるとこの Collection の重点がオウエン自身の稀覯本のうち初版本はむしろ少なく、ただ議会のオウエンの関係した、例えば *Report of the minutes of evidence, taken before the Select Committee on the State of the Children Employed in the Manufactories of the United Kingdom, 26 April-18 June, 1816* 383 p. のようなものも含まれている。

この収集の中心は、これから Robert Owen 研究に入ってゆこうとするときの諸般の有名無名の研究書で、よく調査して採択している。いわば Robert Owen 万華鏡ともいべきもので、今迄相当に熟した研究から更に一步おしすすめて、自分が研究者として一步すすめてゆくのに実に手びろく、よくあつめてあり、羨望に耐えない蒐集といえよう。相当以前のきわめつきのものはもちろん、最近の著作までふくんでいる。

本 Collection は holograph を含んで 233 冊(ただし東大重複のもの若干)に達している。

おもえば私自身オウエン研究を始めて 70 年。大正 12 年の関東大震災のとき当時東大経済学部 3 年生で本位田祥男先生留学中、舞出長五郎先生の御指導で Robert Owen の *The Book of the New Moral World* の田尻文庫の貴重本を借出していて日本橋の自宅焼失の日、母の位牌とこのオウエンの貴重本を持って宮城前の芝生に逃げ、この田尻文庫本をまもりおおせ、学校が始業して大学に無事返却した。現在もその本が東大に残っているのだ。最近この邦訳が出版されることになり実にうれしい。

Vision 第五の中心を占めるのが、オウエン思想の第二の完成の結晶といわれるこの *The Book of the New Moral World* の大冊である。

しかし、本稿は、Vision 第四の本号をもって、打ち切りたい。

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 36*

発行所 東京都国立市中2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1996年10月31日

印刷所 東京都八王子市石川町2951-9

三省堂印刷株式会社

